My Mystery

マイ・ミステリー

新西洋推理小説事情

小鷹信光

早川書房社

マイ・ミステリー
新西洋推理小説事情

一九八二年九月一日　第一刷
一九八二年十月十四日　第二刷　定価一八〇〇円

著者／小鷹信光　©1982 Nobumitsu KODAKA
装幀／池田　拓
編集人／守屋健郎　発行人／加藤祥二
発行所／読売新聞社
〒一〇〇 東京都千代田区大手町一―七―一
〒五三〇 大阪市北区野崎町八―一〇　〒八〇二 北九州市小倉北区明和町一―一一
印刷所／図書印刷株式会社　製本所／ナショナル製本　0095―703340―8715　〈落丁・乱丁本はおとりかえします〉

まえがき

「ミステリーが嫌いな連中はアナーキストである」と喝破したのはレックス・スタウト。
「クライム・ストーリーは現代の道徳劇」といい切ったのはジョン・クリーシー。
〈逃避文学〉などと目くじら立てることはない、「明日へ向う活力の足しになれば充分」といなしたのは各務三郎。
『ミステリーは私の香水』（小泉喜美子）にたいして、『女はいつもミステリー』（青木雨彦）と洒落の応酬もある。

では、小鷹信光にとって、ミステリーとはなにか？

書名に『マイ・ミステリー』とうたったからには、その意味を説明せねばならない。などと物事を固苦しく考えてしまうところが、どうやら私の三つめの悪癖のようだ。で、ひょっこり答えも浮かんだ。「ミステリーは私の二つめの悪癖」だったのである。いまも同じだ。第一の悪癖は、あなたにも教えてあげられない。

ミステリー＝悪癖説を思いつくまでは、冗談でなしにたとえば、「ミステリー、わが命」とか、「ミステリー、わが相棒（あるいは悪友）」説などを考えていた。「生きがい」「人生の半分」「趣味をいかした日々の糧」「実益を兼ねた道楽」説なども真剣に検討した。そのいずれもが、当っていないこともない。ミステリーの熱心な読者だった頃から数えてはや三十年。大マジメに考えれば少しばかり哀しくもなってくるが、悪癖と考えれば気も楽だ。この道一筋などとしゃかりきにならず、気楽に死ぬまでつきあっ

ていける。Mystery Is My Meat. と悪ぶるのもいいが、このいいまわしは、スティーヴン・マーロウの懐かしき五〇年代私立探偵ヒーロー、チェスター・ドラム・シリーズのタイトルからのいただきではないか。ついでに、Mystery Is My Pal. というのも悪くはないが、これではちょっとキザすぎる。「悪友」としても同じだ。ただし、良質のミステリーが、けっして裏切ることのない友であることは確かなのだが。

「あとがきマニア」の私に、めずらしく「まえがき」を付すよう要請があったのは本書の編集者の陰謀かもしれないが、せっかくの機会なので一言させていただこう。

ただ一つの例外(リチャード・スタークの悪党パーカー論の前半)をのぞいて、収録した文章はすべて一九七〇年以降に、雑誌、新聞に発表したものである。全体は七部に分かれているが、それぞれの部の中では各項目が発表年代順に配列されている。編集者の陰謀をものともせず、必要と思われる項目には、しつこく現時点での〔付記〕をつけくわえた。

この〔付記〕をつけくわえる作業の途中で、私は何度となくとまどった。そのとまどいについて少し記してみたい。

「自分自身の書誌をまとめる作業は、ある意味では精神分析を施されるのに似ている——忘れ去っていた過ぎ去った日々が、その作業の過程で再発見されるからだ」と書いたのはロス・マクドナルドだが、私自身も同じような感想を、こぢんまりと抱いた。少年時代にまでさかのぼったわけではなく、たかだかこの十年間の私とミステリーとのかかわりを明らかにしただけのことなのに、確かにいくつかの〝再発見〟を体験するハメになったのだ。

たとえば、ある対象にたいする考え方が、十年前も現在も変わらず、首尾一貫していてなんのこだわりもなく〔付記〕をつけくわえられるテーマがある。こういうのは、先見の明とか、節をまげないとい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うことになるのだろう。が、少しも進歩がない、という反論もかえってくる。

一方では、自分の考え方に、時とともに変化が生じている場合がある。こういうのは、柔軟なものの見方とか、成長とかいうのだろう。が、無定見で、浮気っぽいと逆襲されかねない。これもまあ「第一の悪癖」と同じで、悪癖の悪癖たる所以だともいえる。

そんなわけで、巻末に図々しく〈著訳書リスト〉まで付したこの本は、良くも悪くも小鷹信光とミステリーとの十年間のかかわりのすべてをさらけだしている。精神分析どころか裁判の証拠物件のようなものだ。もし悪癖ゆえに罰せられるとしたら、罪名は感染性ミステリー中毒菌流布罪ということになるだろう。宣告は終身刑。「ミステリーから一生足を洗ってはならない」と言い渡されそうだ。

はい、裁判長殿。

（一九八二・六・一七）

凡例

●収録文の初出(雑誌その他)は原則として各文末に記した。
●邦訳書、和雑誌名、日本公開映画題名は『　』で示した。
●イタリック体(斜体)の原綴りは、未訳単行書名、日本未公開映画題名および洋雑誌名を示す。
●〔　〕内は手入れ時に新たに記した付記、補足。初出時以降に翻訳、公開された単行書、映画題名などは原綴りのあとに〔　〕で示した。
●文中の略記号は次のとおり。

AHMM: Alfred Hitchcock's Mystery Magazine
EQMM: Ellery Queen's Mystery Magazine
『EQ』: *EQMM* 日本語版(光文社)
『EQMM』: 旧 *EQMM* 日本語版(早川書房)
『HMM』: 『ハヤカワ・ミステリ・マガジン』
MSMM: Mike Shayne Mystery Magazine
MWA: Mystery Writers of America　アメリカ探偵作家協会
NYTBR: New York Times Book Review
Saint MM: Saint Mystery (Detective) Magazine
TAD: The Armchair Detective

I　月に一度のおつとめ　ミステリー月評

紙魚の目
1 Playboy に載ったダールの新作中篇が『奇想天外』に訳されなかったわけと老スピレーンの怪気炎 10
2 『奇想天外』の廃刊記念号はいつでるのだろう、というのは悪い冗談だけどおもしろい 14
3 ブラッドベリのインタビューのことを書くつもりだった 18
4 女形のような色男だからといってホモセクシュアルとはかぎらないが
三角関係から身を引いたウェストレイクは賢明だった 21
5 ショート・ショートのおもしろさについて書きはじめたのに
なぜつまらないのかということばかり書いてしまった 25

My Mystery
1 海外推理小説研究の新しい動き 29　2 落第生の弁 31　3 ミステリー収納学 34
4 アメリカのミステリー関連誌 36　5 ヒーローはだれ？ 38
6 ミステリー・アンソロジー 41　7 犯罪は充分引き合う？ 43
8 老ミステリー作家の訃報 46　9 新しいミステリー評論集 48
10 私立探偵小説の流行 50　11 翻訳ミステリー誌の曲り角 53

II ミステリーの旅　紀行エッセイ

マンハッタンに87分署はなかった 58
一九七七年、アメリカを往く
1 ウェストコーストの巻 67　2 ニューヨークの巻 94

III 私の好きなミステリー・ライター　作家と作品

リチャード・スタークと悪党パーカー　六〇年代のスーパー・ヒーロー 110
チェイス・ノート　スラング辞典片手にアメリカン・ハードボイルドをものした英国作家 141
五〇年代のスピレーン　〈血と暴力とサディズムの作家〉の素顔 152
パラノイアックな小宇宙　リチャード・マシスンのニューロティックな恐怖世界 172
ヘンリイ・スレッサーの職人芸　O・ヘンリーを継ぐ当代一流のコント作家 185
ロス・マクドナルドとリュウ・アーチャー　方法としての私立探偵小説の限界 189
ハメット／コンチネンタル・オプ物語　西部のガンマン・ヒーローの直系 222

IV エッセイ・オン・ミステリー16　一九七二―一九八一

1 ハメットの初期三短篇について 240　2 追跡小説の醍醐味 244
3 コロンボばかりがなぜモテる？ 248　4 映画『名探偵登場』始末記 251

5 ウールリッチの未完の遺作『負け犬』257　6 Caper（ケイパー）小説メモランダム259
7 狂気と暴力の季節　フェアベアン『銃撃！』を訳して263　8『マンハント』がおもしろかった頃269
9 冒険小説・ハードボイルド小説のすすめ277　10 ドン・キホーテと私立探偵282
11 ハードボイルド探偵新地図287　12 ハードボイルド探偵はスーパー・ヒーローにはなれない296
13 サム・スペードへのラヴレター298　14 創元推理文庫について299
15〈トリック〉は純日本製ミステリー用語301　16 私の好きなハードボイルド小説ベスト10304

V おもしろくなければすすめない　七〇〇字一本勝負／書評30選

トマス・チャステイン『パンドラの匣（はこ）』306　ウォラス・ヒルディック『ブラックネルの殺人理論』307
ロビン・クック『コーマ』308　G・C・チェスブロ『消えた男』309
ロビン・ムーア『恐喝銀行』310　ジョー・ゴアズ『マンハンター』311
浅倉久志編・訳『ユーモア・スケッチ傑作展』312　ナン&アイヴァン・ライアンズ『料理長殿、ご用心』313
ディック・フランシス『障害』314　ヒュー・フリートウッド『ローマの白い午後』315
マイケル・マクガイア『偽装』316　ロバート・B・パーカー『ユダの山羊』317
ドナルド・M・ダグラス『レベッカの誇り』318　ウォーレン・キーファー『カエサレアのパピルス』319
フランクリン・バンディ『ブラックボックス』320　トニー・ケンリック『リリアンと悪党ども』321
マリオ・プーヅォ『愚者は死す』322　ロバート・ラドラム『ホルクロフトの盟約』323
ケン・フォレット『針の眼』324　レン・デイトン『SS—GB』325
ジェイムズ・クラムリー『さらば甘き口づけ』326　ディック・フランシス『利腕』327
コリン・フォーブズ『黄金猿の年』328　マイクル・コリンズ『ひきがえるの夜』329

カトリーヌ・アルレー『死体銀行』330　エド・マクベイン『カリプソ』331
ジャックマール、セネカル『11人目の小さなインディアン』332
ウィリアム・L・デアンドリア『ホッグ連続殺人』333
クリストファー・フィッツサイモンズ『フィッシャーを殺せ』334
クライブ・カッスラー『マンハッタン特急を探せ』335

VI 犯罪ノンフィクションをどう読むか

アンドリュー・タリー『FBI』338　アーヴィング・ストーン『アメリカは有罪だ』(上下)344
エド・サンダース『ファミリー』347　トーマス・トンプスン『血と金』(上下)356
MWAアンソロジー『私は目撃者』364　アメリカの犯罪ジャーナリズム談義371

VII 一人二役、二人一役　対談評論

私立探偵の系譜　聞き手／名和立行382
『郵便配達夫はいつも二度ベルを鳴らす』談義　聞き手／石田善彦401
小鷹信光著訳書リスト411
索引416～430

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

月に一度のおつとめ

ミステリー月評

紙魚の目

『奇想天外』 1974.6〜10

1　*Playboy* に載ったダールの新作中篇が『奇想天外』に訳されなかったわけと老スピレーンの怪気炎

紙魚というやつは、本や雑誌についている糊を食って生きている昆虫だから、*Playboy* のような針金をつかった中閉じの雑誌には巣くっていない。このコラムは、ニカワをつかった背閉じのペイパーバックや、安物の糊で表紙をはりつけたパルプ・マガジンの類を新旧とりまぜて紹介するのがタテマエなんだけど、第一回は紙魚のつかない雑誌の話になってしまいそうだ。それというのもロアルド・ダールが数年ぶりに新作を *Playboy* の四月号（一九七四年）に発表し、もうすぐ六十歳になる老スピレーンが、*Gallery* の三月号（同）でインタビューに応じていたからなのだ。知ってのとおり、この二冊の雑誌には、紙魚がつかないかわりに、日本の税関を通過すると醜悪な黒インキがべったりとついてくる。その雑誌がなぜ無修正のまま私の手元にあるかということは、職業上の秘密だから教えられない。ブロンドや栗毛色の〝茂み〟や〝翳り〟は活字では表現できそうにないから、かわりにダールの新作中篇でも読み語りすることにしよう。

＊ポルノまがいの艶笑譚

物語は、ヒマとおカネと退屈をもてあました郊外族のパーティからはじまる。原題名 The Great Swit-

cheroo から容易に想像がつくように、奇妙に白けた夫婦交換劇をテーマにした艶笑譚なのだ。

生垣を境にして隣り合せに住む二人の初期中年男性が、妻たちに気づかれずにワイフ・スワッピングを実行しようと計画し、綿密な打ち合せとリハーサルのあと、まんまと目的を達成する。それだけの話がえんえんと原稿用紙で七、八十枚分つづく。そのえんえんとつづくところをかってもいいのだけれど、私のようにポルノずれしている読者がいることをダールは計算にいれなかったのだろうか。

妻たちが寝入ったあと、気どられずにたがいに相手の寝室にもぐりこみ、首尾よく目的を果すシーンで、ダールはこのまえ *Playboy* に売った「来訪者」（『HMM』一九六七年一月号訳載）の手をまたつかっている。「この先のシーンは読者の想像力におまかせする」というやつだ。「来訪者」にはそれなりの凝った設定とコワいオチがついていたが今度の新作には趣向もオチもない。しいて取り得をあげれば、いつも自分の奥さんとどんな具合にやっているのかをあけすけにしゃべりあう箇所とか（性交のパターンですりかえに気づかれないために）、生垣のすきまで二度すれちがう場面（往きと帰りです）でとり交す男同士の会話の不気味なほどの無感動ぶりに、現代人への諷刺がこめられているということになるのだろう。が、この程度で、「ショート・ストーリーでございます」という顔をされたのではたまらない。ポルノ小説の常套パターンのパロディにさえなっていないのだ。

夫たちがいれかわったことに奥さんたちのほうも気づいていながら、だまされたフリをして抱かれていたのだ、といったオチでもついているのならまだしも救いはある。その部分を書きこんでいたら、デキソコナイのポルノ小説ぐらいにはなっていたはずだ。今度ばかりは *Playboy* の編集部が勝手に手を入れたという言いぬけはできないだろう。手を入れていたら、もう少しましな艶笑譚ができあがっていたにちがいないのだから。

いまさらダールでもないんだろうけど、あまりに「昨日は美しかった」のです。中身と値段をハカリにかけて、結局『奇想天外』は翻訳権の交渉途中でオリてしまったという。だが、何十万円もの版権料

をポンと払う、おカネのある退屈な雑誌がいずれあらわれるにちがいない。忠実なるダール・ファンは、期待を裏切られるその日まで、首を長くして待つことにしよう。

〔The Great Switcheroo は「すばらしきかな、夫婦交換」と題されて早川書房刊『来訪者』（表題作と「やりのこした仕事」「離犬」）に、また「スワッピング決行」と題されて集英社刊『プレイボーイ傑作短篇集』に収録された。〕

＊アメリカ文学のチューインガム

Gallery というのは、*Playboy* と *Penthouse* の向こうを張って、ウェストコーストの有名な刑事弁護士リー・ベイリーが出版人になった新しいメンズ・マガジンだ。シェパード事件や〝ボストンの絞殺魔〟の弁護で名声を得、おカネもはいったので出版でもやろうかという心境になったんだろう。刑事弁護士がスポンサーのメンズ・マガジンというのもめずらしい。その三月号に、セックスのことしか頭にないような二度目の若い奥さんシェリと一緒にミッキー・スピレーンがインタビューにひっぱりだされている。新作 *The Last Cop Out* の宣伝にもなるから、当人がすすんで応じたのかもしれない。ミリオン・セラーのマイク・ハマー・シリーズで億万長者になったスピレーンが、カネもいらないのにいまさらなぜ本を書くのかと痛いところをつかれて、一年一作主義で発表している新作の秘密をうっかりもらしてしまっているのがおもしろい。

「カンタンに書けるからだ。一作書きあげるのに二週間とかからない。二か月でいっぺんに五冊書いて金庫にしまっておく。それを一年に一作ずつ順にとりだして売っているだけのことだ。あとの四年と十か月は遊んで暮している」

ウソかホントかわからないけど、彼の新作の古臭さがこれでわかる。いやこの古臭さこそ、スピレーンの身上なのかもしれない。

「タイガー・マンは、私のお気に入りのクレージーな保守主義者だ。読者も大いに気にいってくれてい

る。ファンの大半は右翼のタカ派の連中だ。リベラル派の連中は、貧しい連中に救済の手をさしのべろとか、あれをしろ、これをしろとしゃべりまくっている。誰かが右翼保守層の代弁をしなきゃならない。タイガー・マンは、それをやったから受けたんだ」

ロビン・フッドを憎んでいるスピレーンは「負け犬の厄介者の貧乏人になどなにも恵んでやる必要はない。恵んでやっても浪費するだけだ。地位を利用して、誰でもがやっている脱税をやっただけなのだから、ニクソン大統領を非難する気はない」と、はっきりしている。人気稼業の地位に坐っているタレントや作家で、おためごかしの社会正義を口にする連中は多いけど、スピレーンはまるっきりその逆をいって成功しているのだ。反感をもったら読まなきゃいいだけのことで、社会正義やリベラリズムに害毒をおよぼす反動思想だといって目くじら立てるほうがおかしい。

「批評家などクソクラエだ。連中は私の作品ではなく、私の作品が社会におよぼす悪影響という論点でしか議論したことがない。そういう連中にかぎって、どれだけ多くの市民たちが、ラジカル派やリベラル派や社会保障のムダ金を浪費している貧乏人たちを憎んでいるかということに気づいていないんだ」

正論が好きなんだね、この人は。いつもは山奥に住んでいて、やりたくなると自家用飛行機に乗ってニューヨークで豪華なアパート暮しをしている若妻のもとにすっとんでゆくというスピレーンなんだけど、セックスの好みに関しても超保守派らしい。

「マイク・ハマーと同じで、処女崇拝狂なの。だからあたしと結婚したのよ」と妻のシェリがかたわらでクックッと笑いころげていても、本人は一向に意に介さない。おめでたい人でもあるんだろう。「ラヴ・ロマンスを基調にした冒険恋愛物語を書きたかった」というスピレーンの言葉を、いまも私は信じて疑わない。

アメリカの文学界に占めるあなたの位置は、とたずねられて、「チューインガムみたいなものだ」とこたえている。

「それでもみんなが買うからさ。ちがうかい？」
歳をとると、人間一つぐらいはいいことをいうものだ。
〔スピレーンはこの若妻シェリと一九七六年にとうとう離婚してしまった。〕

2　『奇想天外』の廃刊記念号はいつでるのだろう、というのは悪い冗談だけどおもしろい

雑誌というのは、タテマエとしては、事情の許すかぎり永久に、無限に、えんえんと人類最後の日までも刊行されつづけるものなのだろうか？　タテマエは一応そうなんだろうが、たいていの雑誌はいつかどこかで最終号をむかえる。つまり廃刊というやつだ。未練がましく「休刊」と名乗るやつもある。

いつまでも廃刊、休刊にならない雑誌はコレクター泣かせである。やはりどこかできちんとキリをつけてくれないと、全号揃いで棚に並べる快感が味わえない。『奇想天外』なども、廃刊の日を一日や遅しと待ちかねている熱心なコレクターが多いんじゃないのかな。十二月号あたりで、廃刊記念特別大メチャクチャ号なんていうのを企画したらおもしろそうだ。廃刊記念号をだしておいて、翌月の新年号は何食わぬ顔で創刊一周年記念復刊特大号と銘打ち、きっと定価も三十円ぐらい値上げになる。

＊ネグリジェ美女の表紙絵コンテスト

いまのは悪い冗談だけど、雑誌は永遠にだしつづけるものというタテマエはそろそろぶちこわしたほうがいい。発想の転換というやつだ。この雑誌は、創刊から丸一年で廃刊になる、ということをあらかじめ予告しておいて、その区切った一年間でできるかぎりのことをやる。一年完結主義でゆくのだ。別に一年でなくてもいい。二年に区切ってもかまわないし、三年までならカッコがつく。

「諸般の事情により、残念ながら廃刊のやむなきにいたり、ご愛読くださった読者の皆さまがたにたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com